

高岡市埋蔵文化財調査概報第4冊

越中国府関連遺跡調査概報Ⅱ

—昭和62年度勝興寺周辺地区の試掘調査—

1988年3月

高岡市教育委員会

序

高岡市伏木古国府に所在する「雲龍山勝興寺」は、浄土真宗本願寺派の県内きっての古刹であり、西本願寺本堂を範例とし、破格の規模と形式を備える本堂をはじめ、大規模な伽藍を誇っています。また、約200m四方の境内地は土壘と水濠とに囲繞されており、戦国時代の城郭寺院としての姿を今日に伝えています。

その一方で、この境内地は古代における越中国跡の有力な推定地とされてまいりました。これは、万葉集、地名や伝承、表面採集の遺物等によって論じられてきたのであります。直接的な決め手を欠くものでした。

此度の発掘調査はこの勝興寺周辺地区において実施いたしました。調査の結果、勝興寺に南接する地区において、官衙級の建物址群が確認されると言う画期的な成果を収めるに至りました。周囲の状況を勘案いたしますに、これらは越中国を構成する官衙の一部、すなわち、越中国府の中心施設である政庁を取り巻く官衙の一部と想定されます。この官衙の確認は、予期以上ものであり、今後越中国府跡の究明を行う上で、大きな役割を果たすものと考えられます。

この勝興寺の南側は、白鳳時代前期の瓦出土地として知られている御亭角遺跡であり、越中最古の寺院跡の存在が指摘されています。このように見てまいりますと、勝興寺一帯の歴史的価値の高さ、重要性に改めて驚かされる次第です。

今回の調査に当たり、その所有地の調査を了承されました、勝興寺、横幸秀氏、東亜合成化学工業株式会社の各位に厚くお礼申し上げます。また、御協力いただきました地元の皆様、関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

高岡市教育委員会

教育長 竹下外男

例

1. 本書は、越中国府関連遺跡に対する試掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、昭和62年度国庫補助金の交付を受け、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市伏木一宮1丁目、同伏木古府2丁目に所在する。調査期間は、昭和62年4月21日から4月23日までと、昭和62年8月24日から11月10日までである。
4. 本調査は、越中國府関連跡発掘調査委員会（別掲）の指導を受け、高岡市教育委員会社会教育課文化財保護主事山口辰一が担当し

言

- た。
5. 調査事務は、高岡市教育委員会社会教育課文化化係長河合英郎、同主任片折正明が担当し、教育委員会参事・社会教育課長熊木史郎が総括した。
6. 遺構の記号は下記の通りである。
SA-櫓、SB-建物、SC-廊
SD-溝、SK-土坑、SX-その他
7. 図面の方位は真北（座標北）である。
8. 本書の執筆は山口が担当した。

越中國府関連遺跡調査概報Ⅱ

目 次

序

例言

目次

| | | |
|-----|---------|----|
| I | 序 説 | 1 |
| II | 勝興寺南接地区 | 4 |
| 1. | 概況 | 4 |
| 2. | 遺構 | 6 |
| 3. | 遺物 | 11 |
| III | その他の地区 | 13 |
| 1. | 勝興寺南側地区 | 13 |
| 2. | 勝興寺西側地区 | 14 |
| 3. | 国分寺東側地区 | 14 |
| IV | 結 語 | 15 |

調査参加者名簿

発掘

上田順子、岡島敏雄、奥村利雄、奥村久雄、奥村与作、笠島庄蔵、角村勇吉、藏野広義、後藤誠二、島田英子、島田文子、西村路子、船木悦子、松井弘子、宮口武雄、宮下真知子、青沢克則、吉久恵子

整理

上田順子、小熊冷子、工幸子、新田貢子、船木悦子、松井弘子、宮下真知子、向しみ子、村上美貴子

図版目次

| | | | |
|-----------------|--------------------------------|-----------------|--------------------------------|
| 図版 1 遺構 勝興寺南接地区 | 1. 東半部全景(西) 2. 東半部全景(南) | 図版 8 遺構 勝興寺南側地区 | 1. 敷地全景(東) 2. トレンチ(北) |
| 図版 2 遺構 勝興寺南接地区 | 1. 西半部全景(東) 2. 北東部全景(西) | 図版 9 遺構 勝興寺西側地区 | 1. 敷地全景(北東) 2. 敷地全景(南東) |
| 図版 3 遺構 勝興寺南接地区 | 1. S B01全景(東) 2. S B01全景(南) | 図版10 遺構 国分寺東側地区 | 1. 全景(南西) 2. 全景(東) |
| 図版 4 遺構 勝興寺南接地区 | 1. S B02全景(南) 2. S B02全景(西) | 図版11 遺物 勝興寺南接地区 | 1. 土師器・須恵器・灰陶陶器 2. 紋塗土器 |
| 図版 5 遺構 勝興寺南接地区 | 1. S B03全景(東) 2. S B04全景(南) | 図版12 遺物 勝興寺南接地区 | 1. 灰陶陶器・綠釉陶器 2. 白磁 3. 陶瓶 |
| 図版 6 遺構 勝興寺南接地区 | 1. S B05全景(南) 2. S B06全景(西) | | |
| 図版 7 遺構 勝興寺南接地区 | 1. S B07全景(南) 2. S B08全景(南) | | |

図面目次

| | |
|------------------------|--------------------------|
| 図面 1 遺物実測図 勝興寺南接地区 土師器 | 図面 5 遺物実測図 勝興寺南接地区 須恵器 |
| 図面 2 遺物実測図 勝興寺南接地区 土師器 | 図面 6 遺物実測図 勝興寺南接地区 須恵器 |
| 図面 3 遺物実測図 勝興寺南接地区 土師器 | 図面 7 遺物実測図 勝興寺南接地区 灰陶陶器他 |
| 図面 4 遺物実測図 勝興寺南接地区 土師器 | 図面 8 遺物実測図 勝興寺南側地区 土師器他 |

挿図目次

| | |
|-------------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 (1/5万)..... | 1 |
| 第2図 調査地区位置図 (1/1万5千)..... | 2 |
| 第3図 勝興寺周辺地区位置図 (1/5,000)..... | 3 |
| 第4図 勝興寺南接地区全体図 (1/400)..... | 5 |
| 第5図 勝興寺南接地区遺構図 (1/200)..... | 8 |
| 第6図 勝興寺南接地区遺構配置図 (1/200)..... | 9 |
| 第7図 勝興寺南側地区全体図 (1/400)..... | 13 |
| 第8図 国分寺東側地区位置図 (1/5,000)..... | 14 |
| 第9図 国分寺東側地区遺構図 (1/200)..... | 14 |

I 序 説

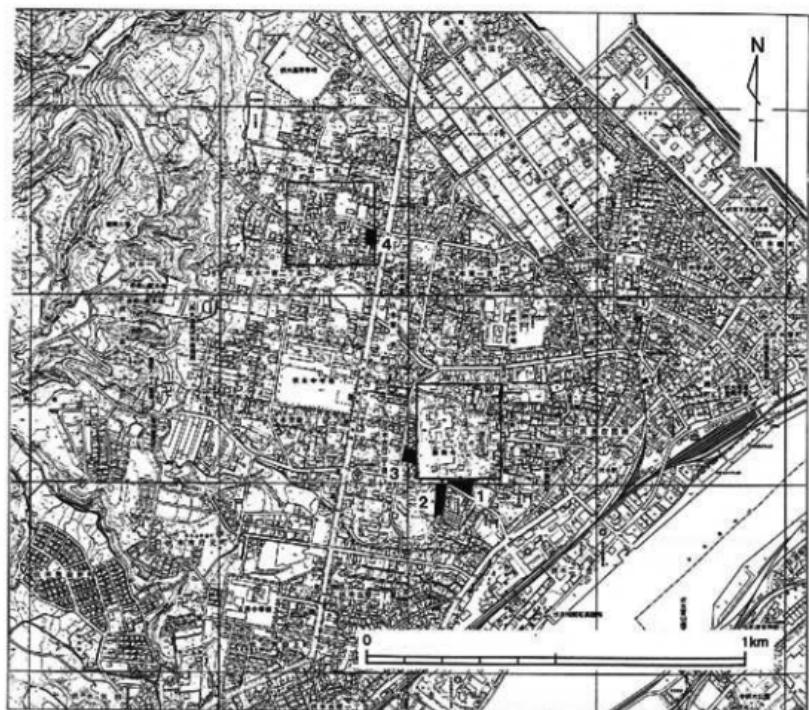
越中国府関連遺跡は、高岡市の西城を蛇行して流れ、富山湾へと注いでいる小矢部川の河口左岸、伏木台地に所在する。伏木台地は上位と下位の2つの段丘よりなり、この全城、南北約2.1km、東西約1.2kmが、越中国府関連遺跡として一まず認定できるものである。勝興寺境内にその所在が推定されている越中国庁跡、県指定史跡である越中国分寺跡を中心として、越中一之宮氣多神社、白鳳時代前期の寺院跡の存在が推定されている御亭角遺跡等貴重な遺跡を含んでいる。また、古瓦出土地はこれらの地点を含めて13箇所にのぼる。さらに、奈良・平安時代を中心とした土器類の散布は台地全体に及んでいる。



第1図 遺跡位置図 (1/5万)

越中国府関連遺跡の試掘調査は、昭和61年度より5箇年計画で行っており、今年度は第2年目に当たる。昨年度は御亭角地区を対象としたが、今年度は、その隣接地である勝興寺周辺を主要な対象地として行った。

勝興寺周辺地区では次の3箇所の地点で調査を行った。1. 勝興寺南接地区、勝興寺に南接する三角地。2. 勝興寺南側地区、いわゆる美野下地区。3. 勝興寺西側地区。1・2は勝興寺、3は横幸秀氏所有地である。発掘調査期間は、昭和62年8月24日から11月10日までである。途中、他遺跡の試掘調査等もあり若干中断した。実働は50日である。なお、勝興寺周辺地区に先行して、越中国分寺跡東側地区の発掘調査を狭い面積ではあるが行った。東亜合成化学工業株式会社所有地で、昭和62年4月21日から23日の3日間行った。4地区の発掘調査面積は、557m²である。また、調査対象面積は約4,600m²となる。



第2図 調査地区位置図（1/1万5千）

1. 勝興寺南接地区、2. 勝興寺南側地区、3. 勝興寺西側地区、4. 国分寺東側地区



第3図 勝興寺周辺地区位置図（1/5,000）

以下の報告では、一番主要な調査地区である「勝興寺南接地区」の概要を先ず述べ、その後他の3地区について述べる。

今回の調査では、調査指導体制を強化すべく、下記の越中国府関連遺跡発掘調査委員会を設定し、指導を行っていただくこととした。

越中国府関連遺跡発掘調査委員会

委員長 渕 昇 富山県文化財保護審議会会长、富山考古学会会長

委 員 秋山進午 富山大学人文学部教授

〃 小島俊彰 高岡市文化財審議委員、金沢美術工芸大学美術工芸学部助教授

〃 西井龍儀 富山考古学会会員

〃 古岡英明 高岡市文化財審議委員、富山考古学会副会長

〃 桃野真晃 富山県教育委員会文化課副主幹

〃 岸本雅敏 富山県埋蔵文化財センター主任

〃 竹下外男 高岡市教育委員会教育長

〃 熊木史郎 高岡市教育委員会参事・社会教育課長

II 勝興寺南接地区

1. 概況

調査対象地は、伏木古府2丁目3番に所在する。土壌で囲まれた勝興寺境内の南側に接する三角形の敷地で、面積は1,400m²である。北側は東西に走る小道を挟んで勝興寺の南側土壌・濠と接する。東側は民家である。南側は古府侵食谷の開口部に臨み、比較的近年に設けられた道路が、段丘下より北西方向に走り、勝興寺の南側に至っている。この道路を隔てた南側は、昭和60年に調査を行った「大藏省北陸財務局高岡古府宿舎地区」である。

この三角地は以前より畠地として利用されてきた。敷地中央部を境いに、地形的に2区分できるものとなっている。やや低い三角形の西部地区と、これより高い東部地区からなり、比高差は約60cmを計る。東部地区が北側の道路面と同一の高さを示すのに対し、西部地区は落差が大きく、瓦粘土の採集地であることを予想せしめるものであった。

発掘調査は、幅3mのトレンチを数条設けて行った。西部地区においては、端部のみ掘り下げ、遺構を載せる基盤の粘土層が存在しないことを確認した。これは、伏木台地における他の地点同様、瓦粘土採集による搅乱を意味している。東部地区は、当初井桁状にトレンチを設定して掘り始めたが、遺構状の落ち込みを確認したので、可能な限り掘り拡げた。ただし、南縁部では遺構を確認することができなかった。調査の性格・目的等より、遺構は検出面での確認に止め、掘り下げは行っていない。なお、搅乱である小さな穴のみ掘り上げ、遺構の確認を容易にした。調査面積は456.0m²となった。

基本層位は、黄褐色粘土の基盤層の上に、30~50cmの表土（耕作土）が載るという単純なものである。

今回報告する遺構実測図は、第5図として検出した遺構をすべて示したが、これのみでは煩雑なため、第6図として、単独のピット以外の遺構として認定したものを見た。スクリーントーンを貼った部分は、掘立柱建物址の掘り方である。方眼は3m四方の一つのグリッドを示し、東西をX軸、南北をY軸とする。平面直角座標系の第7座標系の原点（北緯36°00'00'', 東経137°10'00''）より、X=1, Y=1の地点は、西へ9,858m、北へ87,483m向った位置である。

検出された遺構は以下の通りである。

掘立柱建物址 9棟 (S B01~09)

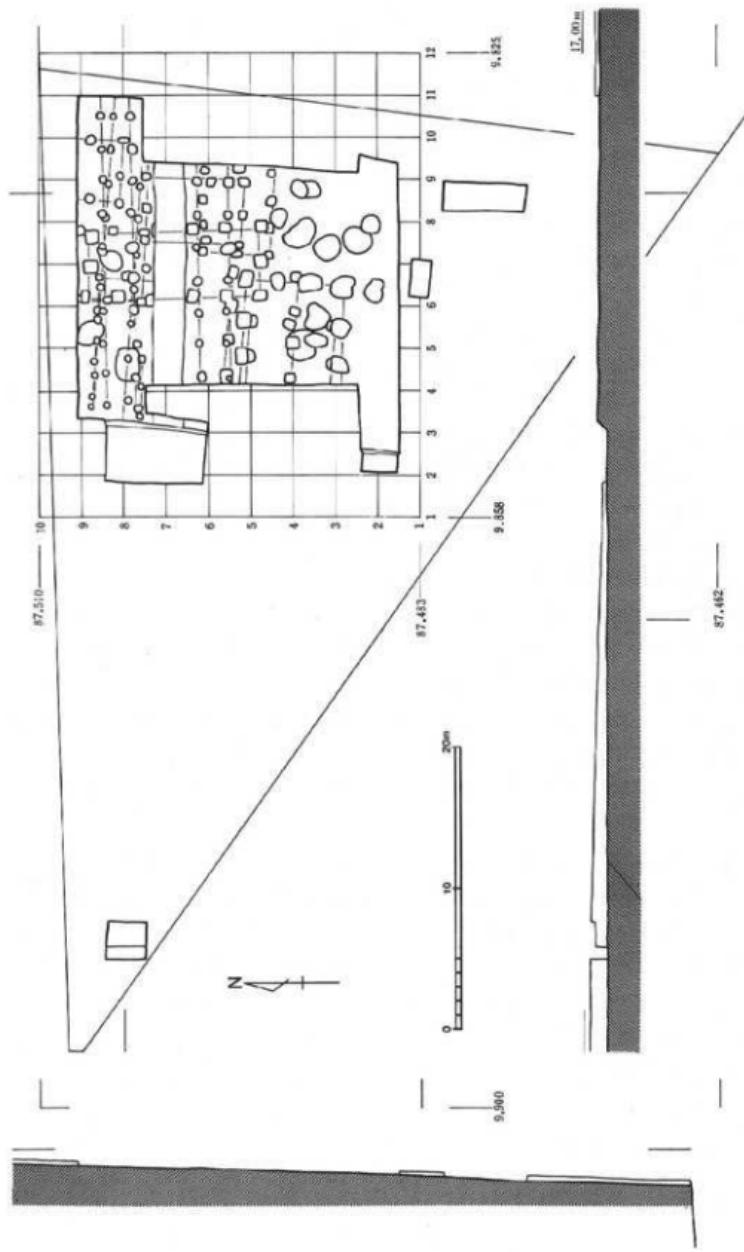
櫛址 1条 (S A01)

廐址 3条 (S C01~03)

土坑14基 (S K01~14)

溝1条 (S D01)

第4図 脩興寺南接地区全体図 (1 / 400)



2. 造 構

掘立柱建物址

建物址の掘り方（柱穴）の呼称については、南北棟であるか、東西棟であるかにかかわりなく命名した。南西隅の掘り方を基点に、東西方向にX軸、南北方向にY軸を取り、座標で示した。すなわち、南西隅の掘り方を、P 1 (X軸=1) - 1 (Y軸=1) とし、以下、P 2 - 1 や P 1 - 2 等で表わした。基点の掘り方が不明の場合は、その掘り方が、最底何番目の掘り方になる可能性が高いかを考え、その番号に「 α 」を付けて示した。

S B01 東西棟の掘立柱建物址。規模は桁行3間(8.1m)以上×梁行3間(7.2m)である。棟の方位は、真東に対して3度北へ偏っている。柱間寸法は、桁行2.7m等間、梁行2.4m等間を計る。掘り方は方形で、長軸120～160×短軸100～150cmを計る。S B02・03・04、S K04・05・06と重複している。当建物址の掘り方と切り合うのは、S B03の掘り方である。すなわち、当建物址のP 2 α - 1 (検出した中で南西側掘り方)、P 3 α - 1、P 2 α - 4、P 3 α - 4の4つの掘り方である。しかし、調査が不十分であったこともあり、新旧関係は不明である。S B03の掘り方との重複、抜き方の存在、そして掘り下げていないこともあり、掘り方の形態を明確にできないが、一辺1m以上を計る方形のものであることは確実なことと考えられる。

S B02 南北棟の掘立柱建物址。規模は桁行5間(12.0m)×梁行2間(4.8m)である。棟の方位は、真北に対して2度西へ偏っている。柱間寸法は、桁行2.4m等間、梁行2.4m等間を計る。掘り方は方形で、長軸80～100×短軸70～90cmを計る。S B01・04～08、S C01～03、S K03と重複している。掘り方相互が切り合う、S B04・07との新旧は不明である。S B05とは、南側梁行、P 2 - 1・P 3 - 1で切合っているが、当S B02がS B05を切っていることを確認している。また、S D01が当建物址を分断する形で東西に走り、P 1 - 4・P 3 - 4を切っている。なお、当建物址を単純に5間×2間のものとすることに対しては、若干の疑義が存在する。柱位置を掘り方の中央に想定した場合、北側梁行が南側より短くなる点、桁行の柱筋と梁行の柱筋とが直交しない点、東側桁行、P 3 - 5が存在しない点である。これについては、北側梁行がS D01に切られて存在しない、3間×2間の建物址を想定し、この北側に付属する形で別の建物址が設けられたと解釈することも可能であろう。

S B03 東西棟？の掘立柱建物址。規模は桁行2間(5.4m)以上×梁行2間(6.0m)である。棟を東西に置くとして、方位は、真東に対して3度北へ偏っている。柱間寸法は、桁行2.7m等間、梁行3.0m等間を計る。掘り方は方形で、一辺約80cmを計る。S B01・04、S K04～06と重複している。当建物址はS B01の中に入る形となり、桁行掘り方が、S B01の桁行掘り方に添う形となっている。この点からは、当建物址を独立したものと考えるよりも、S B01に伴うものとした方がよいのかもしれない。この場合、根太を支える大引の掘り方との解釈も可能となってくる。

S B04 東西棟の掘立柱建物址。規模は桁行3間（7.2m）以上×梁行1間（4.8m）である。棟の方位は、真東に対して3度北へ偏っている。桁行柱間寸法は、2.4m等間を計る。掘り方は方形で、一辺60~100cmを計る。S B01~03, S C03, S K04と重複している。S B01・02とはそれぞれ1箇所で掘り方相互が切り合うが、新旧は不明である。北側桁行はS C03に切られている。

S B05 東西棟の掘立柱建物址。規模は桁行3間（5.85m）×梁行2間（4.8m）である。棟の方位は、真東に対して2度南へ偏っている。柱間寸法は、桁行1.95m等間、梁行2.4m等間を計る。掘り方は方形で、一辺40~80cmを計る。S B02・06, S C03と重複している。南側桁行、P 1-1・P 2-1がS B02の掘り方に切られている。また、P 1-2, P 1-3が、S C03の掘り方に切られている。

S B06 南北棟の掘立柱建物址。規模は桁行3間（6.75m）×梁行2間（4.5m）である。棟の方位は、真北に対して3度東へ偏っている。柱間寸法は、桁行2.25m等間、梁行2.25m等間を計る。掘り方は方形で、一辺40~70cmを計る。S B02・05・07, S C03, S D01と重複している。P 1-4がS B07の掘り方と僅かに切り合うが、新旧は不明である。当建物址の北側で、S D01が東西に走る。P 1-3・P 3-3はこれに切られているために確認できなかったものと判断される。

S B07 南北棟の掘立柱建物址。規模は桁行3間（6.75m）以上×梁行2間（4.8m）である。棟の方位は、真北に対して2度東へ偏っている。柱間寸法は、桁行2.25m等間、梁行2.4m等間を計る。掘り方は方形で、一辺50~60cmを計る。S B02・07, S C01・02, S K03と重複している。P 1-1・P 1-2・P 1-3がS B02の掘り方と、P 3-1がS B06の掘り方と、それぞれ僅かに切り合うが、新旧は不明である。

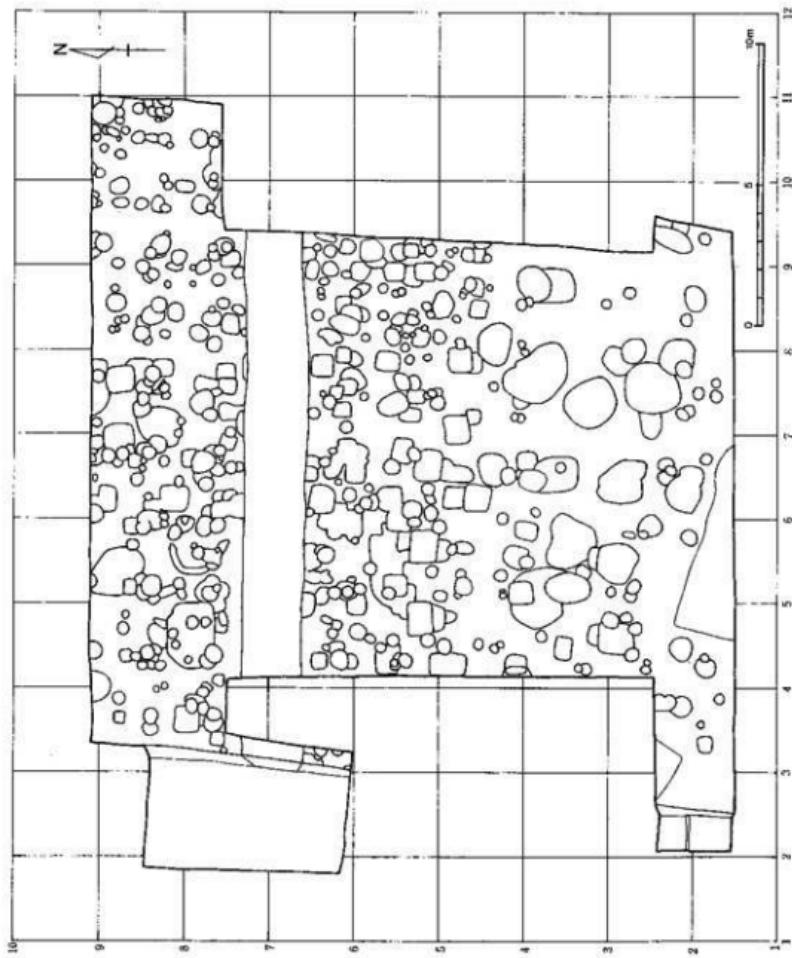
S B08 東西棟の掘立柱建物址。規模は桁行4間（9.0m）以上×梁行2間（4.0m）？である。棟の方位は、真東に対して3度南へ偏っている。桁行柱間寸法は、2.25m等間を計る。掘り方は方形で、一辺40~50cmを計る。S B02・07, S A01, S C01・02, S K01・02, S D01と重複している。S C01・02の掘り方に切られている。南側桁行がS D01に切られて存在していないものと考えて、上記のような建物址としたが、北側の調査地区外に拡がる建物址、ないし柵址になる可能性も高い。

S B09 南北棟？の掘立柱建物址。規模は桁行2間（4.4m）以上×梁行2間（4.4m）？である。棟を南北に置くとして、方位は、真北に対して4度東へ偏っている。柱間寸法はやや不揃いだが、桁行・梁行とも約2.2mを計る。掘り方は梢円形で、長軸60~70×短軸40~60cmを計る。建物址とするにはやや不安な点もあるが、この付近にはややビットが少なく、この中にあって、建物址としたビットが類似した様相をもっていたことによる。

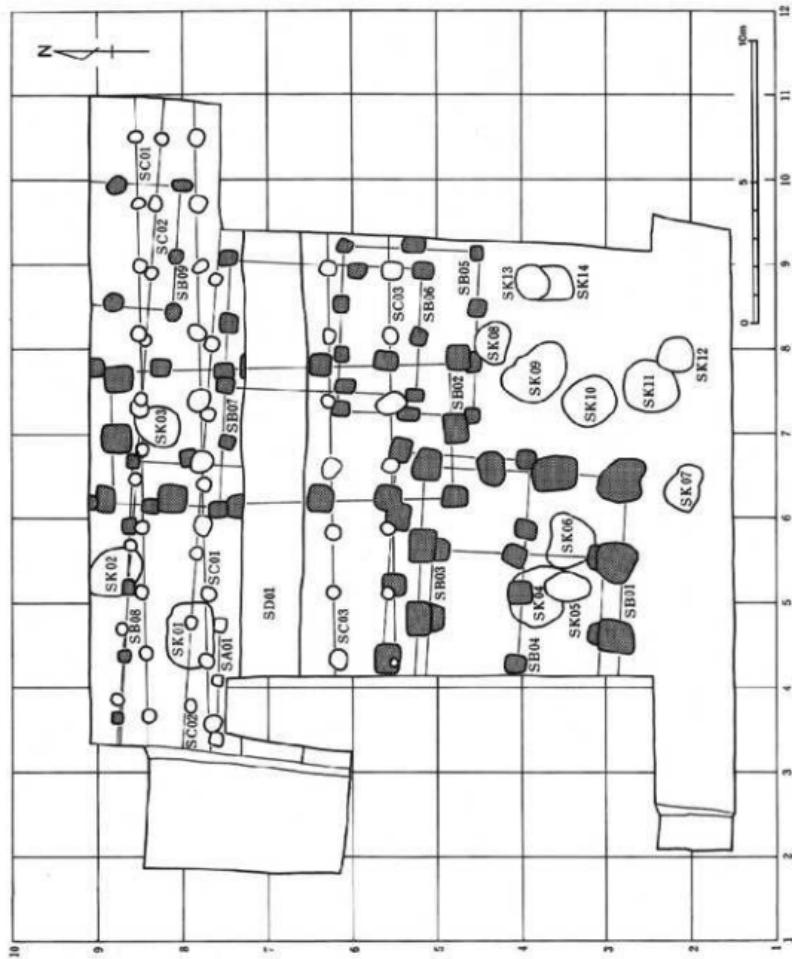
柵址

S A01 東西に延びる柵址。規模は3間(4.0m)以上である。方位は真東に対し2度南へ偏っている。掘り方は方形で、一辺40~50cmを計る。

第5図 勝興寺南接地区
遺構図 (1 / 200)



配置圖 (1 / 200)



廊址

S C01 東西に延びる單廊址。規模は桁行9間（20.7m）以上×梁行1間（2.1m）である。方位は、真東に対し1度北へ偏っている。桁行柱間寸法は、2.3m等間を計る。掘り方は円形ないし楕円形で、径40~70cmを計る。S B02・07~09、S C02、S K01・03と重複している。S B08の掘り方、S C02の掘り方、S K01を切っている。

S C02 東西に延びる單廊址。規模は桁行8間（20.0m）以上×梁行1間（2.3m）である。方位は、真東に対し4度南へ偏っている。桁行柱間寸法は、2.5m等間を計る。掘り方は円形ないし楕円形で、径40~70cmを計る。S B02・07~09、S C01、S K01~03と重複している。S C01に切られ、S K01~03を切っている。

S C03 東西に延びる單廊址。規模は桁行6間（13.8m）以上×梁行1間（2.1m）である。方位は、真東に対し1度北へ偏っている。桁行柱間寸法は、2.3m等間を計る。掘り方は円形ないし楕円形で、径40~70cmを計る。S B02・04~06と重複している。S B04の掘り方を切っている。

土坑

S K01 隅丸方形の土坑。規模は長軸230×短軸170cmを計る。S C01・02に切られている。

S K02 不整楕円形の土坑。規模は長軸220×短軸160cmを計る。S B08、S C02に切られている。

S K03 不整楕円形の土坑。規模は長軸160×短軸140cmを計る。S C02に切られている。

S K04 不整形の土坑。規模は長軸220×短軸190cmを計る。S K05に切られている。S B04の掘り方P 3α-1に切られているように図示しているが、この新川関係は確定なものではない。

S K05 不整楕円形の土坑。規模は長軸160×短軸110cmを計る。S K04を切っている。

S K06 不整形の土坑。規模は長軸190×短軸160cmを計る。

S K07 不整楕円形の土坑。規模は長軸160×短軸120cmを計る。

S K08 不整楕円形の土坑。規模は長軸150×短軸110cmを計る。

S K09 不整楕円形の土坑。規模は長軸250×短軸170cmを計る。

S K10 不整円形の土坑。規模は径160~190cmを計る。

S K11 不整円形の土坑。規模は径180cmを計る。S K12に切られている。

S K12 不整円形の土坑。規模は径120cmを計る。S K11を切っている。

S K13 不整円形の土坑。規模は径120cmを計る。S K14を切っている。

S K14 隅丸方形の土坑。規模は長軸140?×短軸120cmを計る。S K13に切られている。

溝

S D01 東西に走る溝。規模は幅220~230cm、深さ55cm以上を計り、18.6mにわたって検出された。東側は調査地区外となり、西側は擾乱によって切られている。S B02・06と重複し、これらを切るものである。

3. 遺物

遺構を掘り下げていないので、出土遺物は、表土層及び攪乱からの出土である。表土層からの出土としては量的に多いと言える。出土遺物のほとんどは、土器・陶磁器類である。

土器

高杯 図面1-101。高杯の柱状部である。

椀類 図面1・2-102-161。杯ないし椀の形態を呈するもので、すべてロクロを使用している。ただし161は不明確である。内黒土器の138-140とやや特殊な110以外、基本的には全面丹塗りされていると考えられる。丹塗りが明確であるものはスクリーントーンを貼って明示した(108・109, 111-119, 148・149)。これら以外も磨滅や剥離のため、丹塗りが認められないが、遺存状態の良好なものより類推してこのように認識している。無高台の椀を中心に一部高台付椀も含まれていると考えられる。高台部の148-161は、高台付椀ないし高台付皿の部分であろう。160と161は一般的なものではない。無高台の椀の102-137は、底部に再調査が施されず、糸切り痕がそのまま付いている。

皿類 図面3-162-199。以下のように5つに分類される。

- A. 162-164。高台付皿、ロクロ使用。
- B. 165-167。非ロクロの皿。
- C. 168-183。ロクロ使用の皿、底部には糸切り痕が付く。169は丹塗りしている。
- D. 184-197。柱状高台の皿。ロクロ使用で底部には糸切り痕が付く。大型の柱状部を持つものの184-187、柱状部が低く未発達のものの188-190も見られる。
- E. 198-199。中空の柱状高台の皿。ロクロ使用と考えられる。

大型の椀・皿類 図面4-200-203。通有の椀・皿類と異なる大型品を3点掲げた。全体の形態は不明だが、いずれも高台を有する。ロクロ使用と考えられる。

盞 図面4-204-206。長縫の口縁部と推定した204・205と同じく底部と推定した206である。

鍋 図面4-207-209。半球形の底部が付く鍋の口縁部と推定したものである。

甑 図面4-210。単孔の大型甑の底部と推定したものである。

須恵器

杯 図面5-211-217。高台の付かない杯の211-213と高台付杯の214-217の両者がある。底部の切り離し技法はヘラ切りだが、216のみ糸切りとなっている。214-215の底部内面には仕上げナデが認められる。

杯蓋 図面5-218-233。高台付杯に伴う蓋である。218・219は口縁部内面にかえりが付くものである。227は口端部が欠損しているが、巻き込むようにして終るものと考えられる。

壺蓋 図面5-234。短頸壺の蓋と考えたもので、天井部をヘラ削りしている。

瓶類 図面6-235-239。広口瓶の口縁部と瓶類の底部と考えられるものである。

甕類 図版6-240。大型の甕の口頸部である。外面には粗雑なヘラ描き波状文が付く。

鉢類 図版6-241~245。それぞれ形態を異にするので、個別に若干の説明を行う。

241. 把手付きの平鉢。口縁・体部は直線的に内下方へ延びる。把手は基部のみ残存している。

242. 浅鉢型？の大型品。丸味を持つ体部より口縁部は直立する。

243. 玉縁状口縁の擂鉢。口縁部外端径18.8cmを計る小型品。口縁部の屈曲はほとんど見られない。丹波系須恵器。

244. 玉縁状口縁の擂鉢。口縁部外端径25.0cmを計り、このタイプとしては通有の大きさである。口縁部が屈曲して立ち上がって玉縁状の端部へ続く。丹波系須恵器。

245. 珠洲の鉢。深碗型の小型品。底部には（回転）糸切り痕が付く。

灰釉陶器

図版7-246・247。この2点のみ確認している。断面三角形の高台部が付く椀である。灰釉陶器としては新しい段階のものである。246は漬け掛けの薄い白色の釉が付く。

綠釉陶器

図版7-248~251。14点出土した。その内4点図示した。京都系と考えられるものが中心である。250は高台末端部に沈線があり、近江庶の可能性がある。251は蛇ノ目高台風となっている。

白磁

図版7-252~262。14点出土した。その内11点図示した。いわゆるIV類が中心である。

製塙土器

製塙土器の破片が約60点出土している。一部は図版11に示した。これらはすべて、大型のバケツ型になるとされる。

瓦

いわゆる越中国分寺期瓦とされているものの内、平瓦が12点出土している。凹面には布目で糸切り痕が付き、凸面には繩目叩きで離れ砂が見られる。

陶硯

円面硯である。図版7に11~13の3点図示した。これ以外に円面硯と思われる破片が1点出土している。11は外縁径9.6cmを計る。陸部と海部との間に境が設けられていない、硯面は凸面になる。脚部に円形の透し孔が90度の間隔を持ち2つ確認できる。12は外縁径8.8cmと想定できる。方形の透し孔になると思われる部分の存在より円面硯とした。13は円面硯の脚下半部としたものである。縦線の沈線文の存在より円面硯と考えたが、未端部は内方へ続くようでは通有のものとは違ひ、どのような形態になるか理解できていない。

製鉄関連遺物

図示していないが、輪の羽口、鉄滓が出土している。

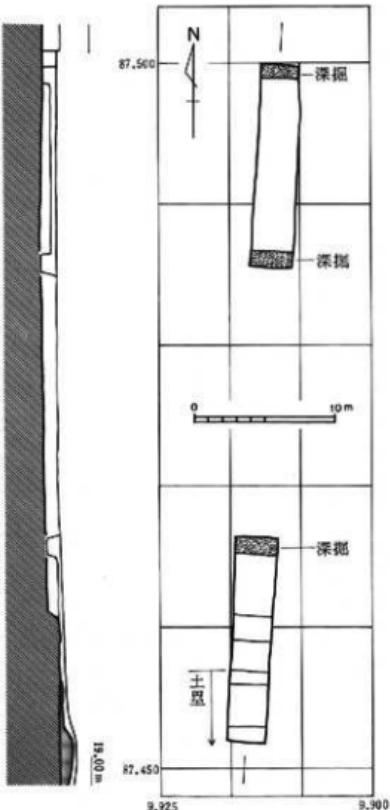
砥石

図示していないが、砥石が1点出土している。

III その他の地区

1. 勝興寺南側地区

調査対象地は、伏木古府2丁目3番に所在する。勝興寺南側一帯に拡がる畠地の一部、1,900m²を一応対象地とした。この敷地は約4,340 m²を計り、中央には、やや崩れているとは言え、戦国時代の土塁が東西に横たわり、往時の名残りを止めている。



第7図 勝興寺南側地区全体図 (1/400)

発掘調査においては、トレーナーを一条設定した。これは、敷地の北端部から中央の土塁まで、幅3m、長さ約48mにわたるものであった。実際の作業では、北部の約14.5m、南部の約14.5mのみ掘り下げ、中央部の約19mは省略した。調査面積は80.3m²である。

表土（耕作土）を取り除いても、遺構を截せる黄褐色の粘土層が現われず、灰褐色土が続くものであり、このことより、瓦粘土採集による擾乱を受けていることが判明した。駄目押しの意味で3地点において深掘りを行い、擾乱であることを確実にした。黄褐色粘土層は、土塁の付近でのみ残存していた。

出土遺物は、土師器・須恵器・瓦である。その主なるものは図版8に示した。土師器の内、301は全面丹塗りの大型蓋である。303～306は非ロクロの皿である。302と柱状高台の皿307～309はロクロ製品である。須恵器では、310～327が杯及びその蓋、328・329が壺及びその蓋である。瓦の出土量は比較的多い。奈良時代後半頃の瓦と白鳳時代前期頃のいわゆる御亭角系瓦が出土している。

2. 勝興寺西側地区

調査対象地は、伏木古府2丁目7番に所在する。勝興寺西側の畠地で、東側は小道を挟んで勝興寺境内の西側の土里に接する。西側は道路によって区画されている。北側と南側は宅地となっている。敷地面積は1,100m²である。現在は平坦地となっているが、聞き取り及び古地図より、開拓谷の支谷が入り込んでいるものと理解された。

発掘調査は当初手掘りで開始したが、表土（耕作土）の下には、砂礫層の盛り土が堅く厚く堆積していることが判明した。よって、バックフォーにより掘り下げることに変更した。調査面積は8.7m²である。層位は、上より ①盛り土 130cm。②暗灰褐色土層30cm。③青色粘土層10cm。④基盤の礫層となる。遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

3. 国分寺東側地区

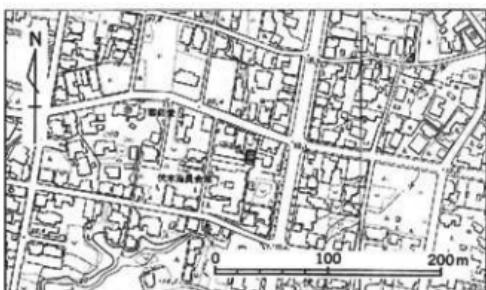
調査対象地は、伏木一宮1丁目1番に所在する。約200m²の宅地の一部、庭先部分の調査を行った。越中国分寺跡の東方約100mの地点である。この敷地の東側は、国道415号線に面する。南側は旧伏木海員会館である。12m²の調査を行った。

層位は単純で、表土の下は、黄褐色粘土層の基盤層となる。

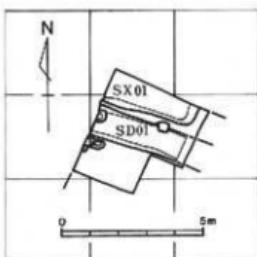
検出された遺構は、溝1条（SD01）と竪穴状遺構1基（SX01）である。

SD01は、東北東～西南西に走る溝。規模は、長さ3.5m、幅100～115cm、深さ19cmを計る。U字溝で調査地区外へ延びている。SX01は、長辺3.2m以上×短辺1.2m以上で、39cmの深さで掘り込まれていた。

出土遺物は、奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、縄文時代の石鏃1点である。



第8図 国分寺東側地区位置図 (1/5,000)



第9図 国分寺東側地区
遺構図 (1/200)

IV 結語

概観

此度の主要地区である「勝興寺南接地区」で得られた知見や気づいた点を述べて結語としたい。勝興寺の南側一帯は「御亭角（おちんかど）遺跡」と称され、白鳳時代前期の瓦が出土することより、廃寺址の存在が指摘されてきた。また、越中国分寺期の瓦をはじめ、白鳳時代前期以降に属する遺物の出土より、その後も遺跡地として存続していたものと解釈されてきた地点である。一方200m四方を計る勝興寺境内は、戦国時代の城郭寺院としての威容を伝える土塁に囲まれていると共に、「大友遺跡」とも称されて、古代における越中国守跡の推定地と評価されている。このような遺跡地の一角に位置する「勝興寺南接地区」は、近世末以降、当伏木台地で大規模に実施された瓦粘土採集による擾乱を免れることができていたならば、良好な遺跡地の一部としての期待を十分に抱かせるものであった。

造構

建物址や廊址を構成するものとした掘り方も含め、掘り方・ピットは方形のものと円形のものとに大きく分かれ。円形のものが方形のものを切っており、この違いは基本的には時期差を示している。さらに溝を切り込む、掘り方・ピットが確認されないことより、遺構は次のように時期区分できる。1. 掘立柱建物址・棚址・方形ピット。2. 廊址・円形ピット。3. 溝。

掘立柱建物址としたものについては、礎石や根石は検出されず礎石建物ではない。また瓦がほとんど出土しなかったことより、瓦葺建物とは考えられない。内容がややはっきりしないSB09以外の建物址の特徴として、次のことを挙げ得る。

1. 掘り方は方形で、一辺1mを超えるものがある。
2. 柱間寸法は、7尺以上と広く、SB01~04においては、8尺、9尺等完数尺で設計されている。SB05~08においては、7.5尺が中心である。
3. 建物の方位は、東西ないし南北を向き一定している。

上記の点より、これらの建物址は、大型で企画性を持つものと言え得る。換言すれば、官衙級で官衙的な建物址群となる。

土坑については掘立柱建物址と前後する時期と考えられる。多数検出された円形ピットについては、規則的配列を確認し、構造物として認定するに至らなかつたが、掘立柱建物址に続く遺構としてよいであろう。廊址を構成する掘り方も円形を示すが、他の円形ピットより古い様相は窺われず、同時期ないしやや新しいものであろう。廊址と溝との新旧については、廊址が溝より確實に古いとは言えず、同時期の可能性もある。溝については一番新しい遺構であり、昭和61年度の「御亭角地区」の溝SD06と類似していることもあり、戦国時代に下る可能性を指摘しておきたい。

遺物

出土遺物のはほとんどを占めるのが、土器・陶磁器類である。特徴を記すと以下の通りとなる。

1. 梗・皿類の供膳形態がほとんどを占め、甕・鍋類の煮沸形態が極端に少ない。一般集落遺跡出土品とその組成を大きく異にしている。
2. 灰釉陶器・綠釉陶器・輸入白磁の一定量の出土。畿内や西国とは違い、これらは当地域においては高級品であったと推定される。
3. 丹波産須恵器鉢の出土。玉縁状口縁の擂鉢243・244について、宇野隆夫氏より、京都府亀岡市篠磨塚群の製品で10世紀代のものであるとの御教示をいただいた。また「古府宿舎地区」出土品の中にも一点存在していることも御教示いただいている。遠隔地からの搬入品であり、当遺跡の特殊性を示していると言える。
4. 製塙土器の出土。一般に奈良時代頃のものとされる大型平底のものである。出土量は少なく、当地で生産が行われていたと解釈するより、製鉄関連の遺物の存在もあり、工房址との関連で位置付けるのがよいと思われる。
5. 7世紀後葉から12世紀代のものである。7世紀中葉以前、13世紀以後と考えられるものも存在するが極めて僅かである。

1～4については、相対的にではあるが、官衙的な性格を与えることができ、さらに瓦や陶瓦の出土のことを加えれば、より明確に言えよう。5については、7世紀後葉を明示するものとしては、かえりが付く杯蓋の存在を掲げ得る。12世紀代前後のものとしては、珠洲第1期とされる擂鉢（片口鉢）245がある。器高が深い小型品で、おろし目ではなく回転糸切りと言う。初期珠洲陶の特徴を示している。また、古代から中世へかけての土師器小皿の変化を、ロクロ製品の減少と非ロクロ製品の増加と理解するなら、ロクロ製品の圧倒的多数、非ロクロの土師器皿が古い様相を示す点、柱状高台の土師器皿が多数存在する点も加味し、これらが12世紀頃のものを示すと考えた。このような出土土器の時期の点でも、官衙的性格を与え得るものとなっている。

遺跡

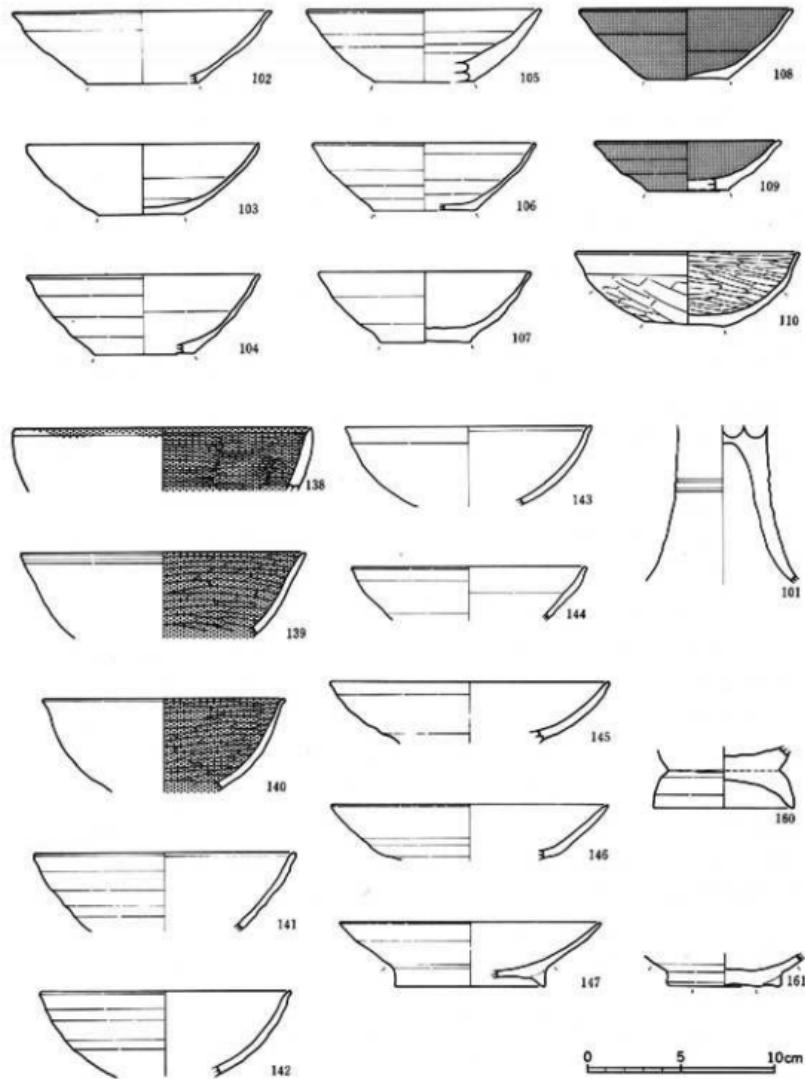
出土遺物について、それが官衙的に内容を持つことは、隣接する「古府宿舎地区」出土遺物についても同様である。今回の調査ではこのことに加えて、構造の上でも官衙的性格が窺われる内容となった。検出した遺構については、掘り下げていないので、素より時期を明確にできないが、確認面での出土土器の年代観等より、掘立柱建物址については、8～10世紀、廓址・溝については、10世紀以降で戦国時代まで降る可能性があるものとしておきたい。

遺物が7世紀後葉以降のものが主体であること、掘立柱建物址が官衙級のものであること、国庁跡推定地に隣接すること等を勘案するに、当地区が国庁跡の一画である可能性がてきた。

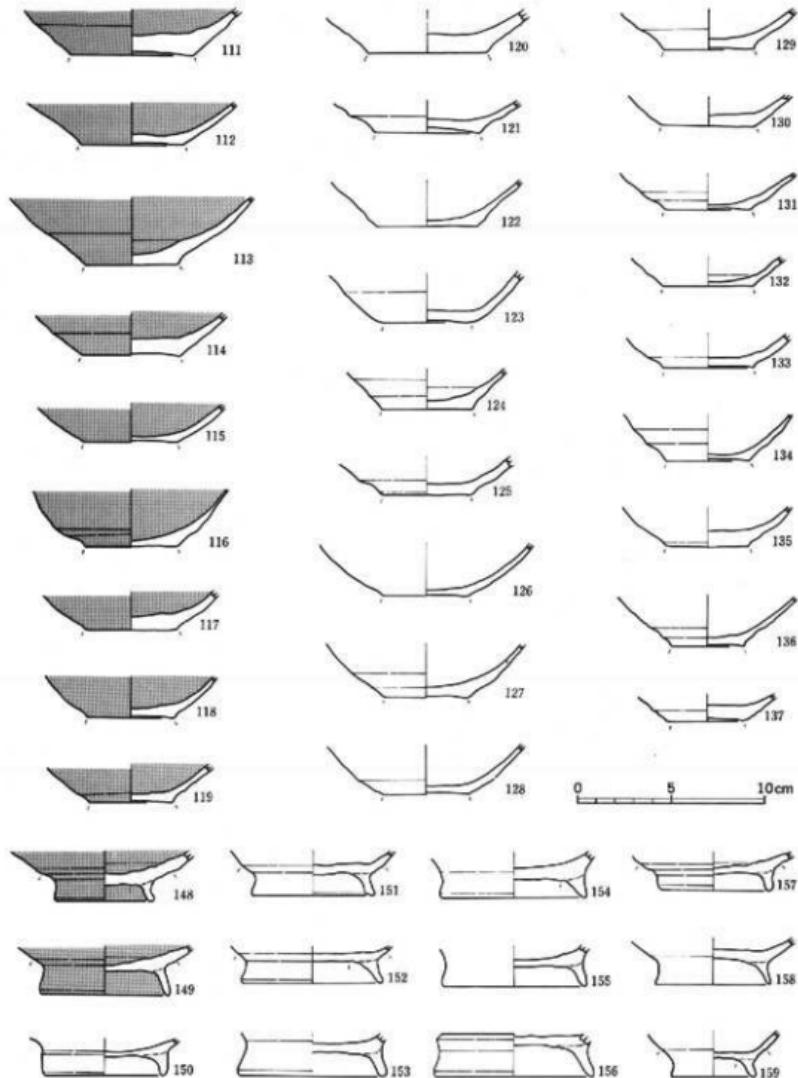
伏木台地は、越中国庁・国分寺を中心に数々の遺跡の所在地とされながらも、明確な形で建物址が検出されたのは今回がはじめてであり、国庁・国分寺の究明にとって大きな意義をもった調査であったと言える。

図面一 遺物実測図

勝興寺南接地区

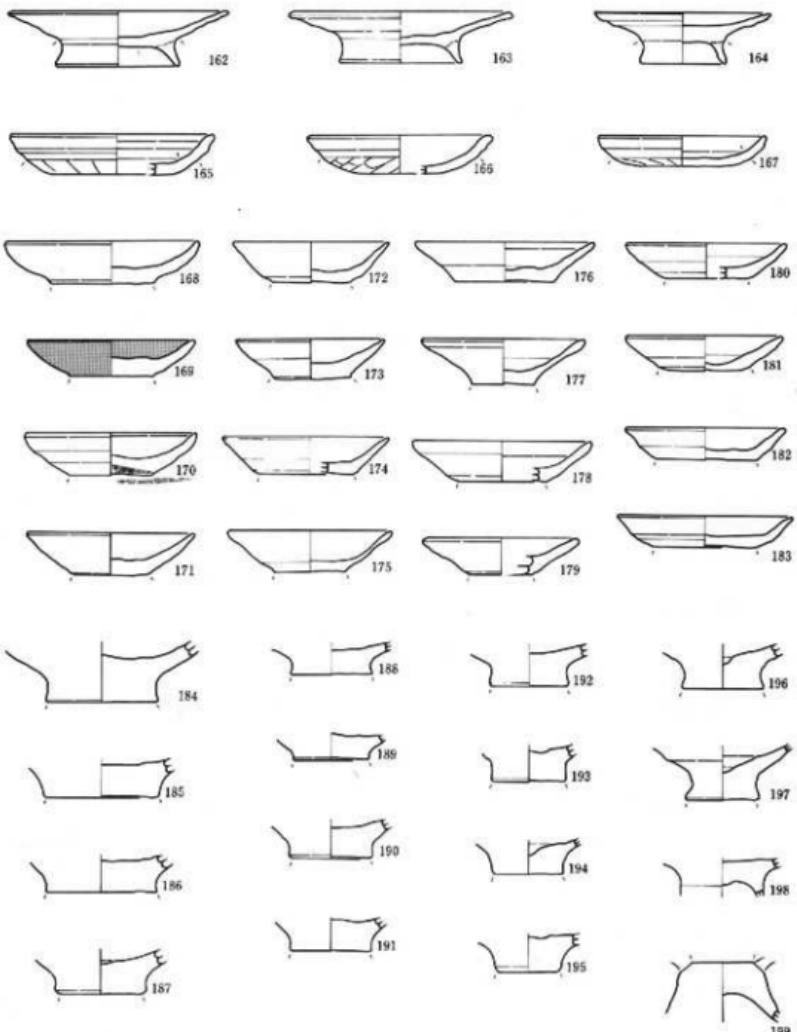


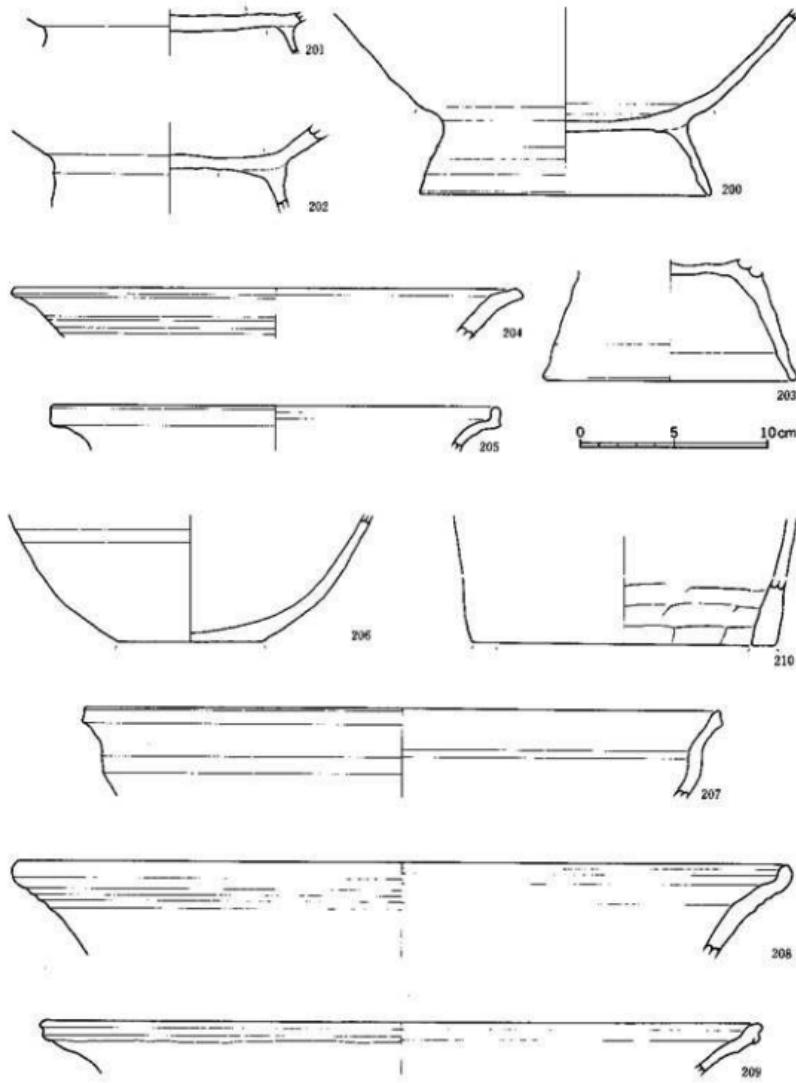
図二
遺物実測図
勝興寺南接地区



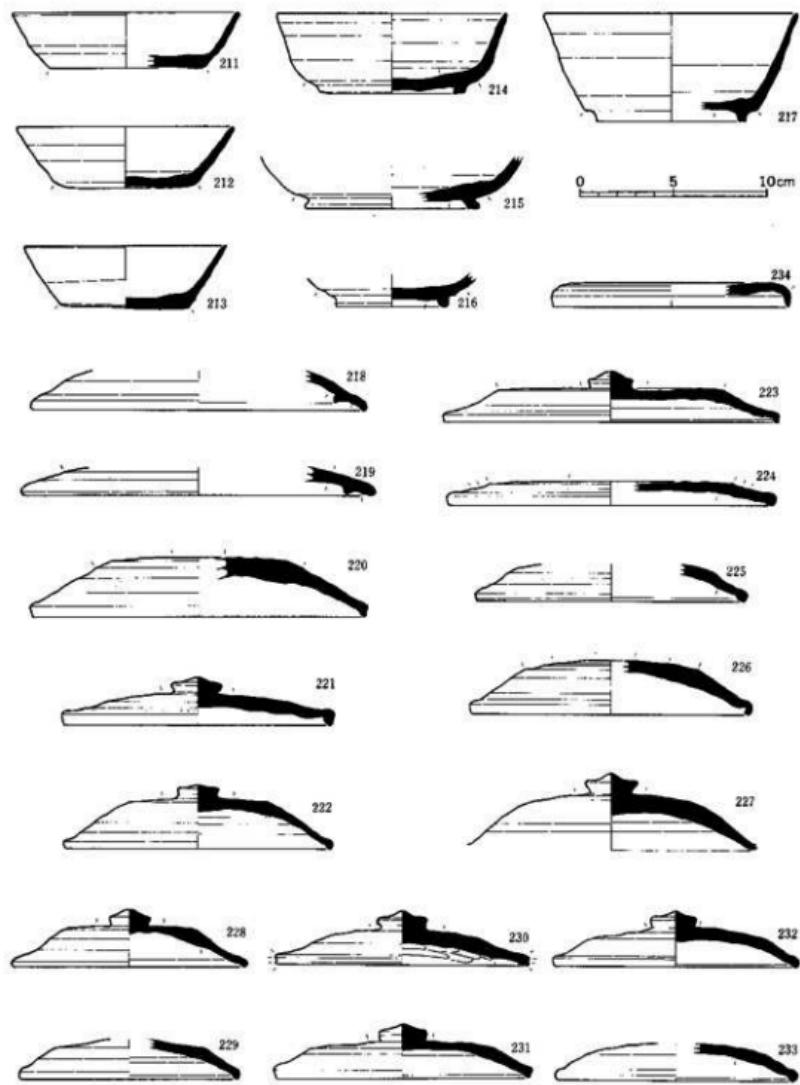
土師器

縮尺1/3

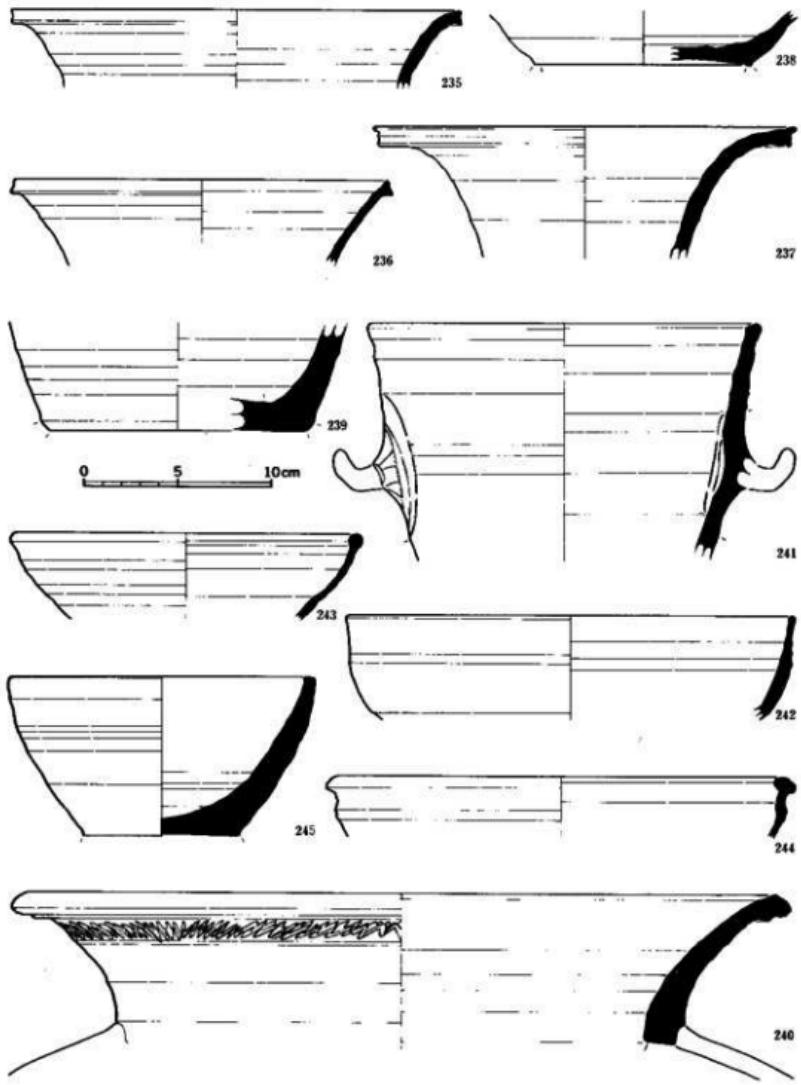




圖面五 遺物実測図
勝興寺南接地区



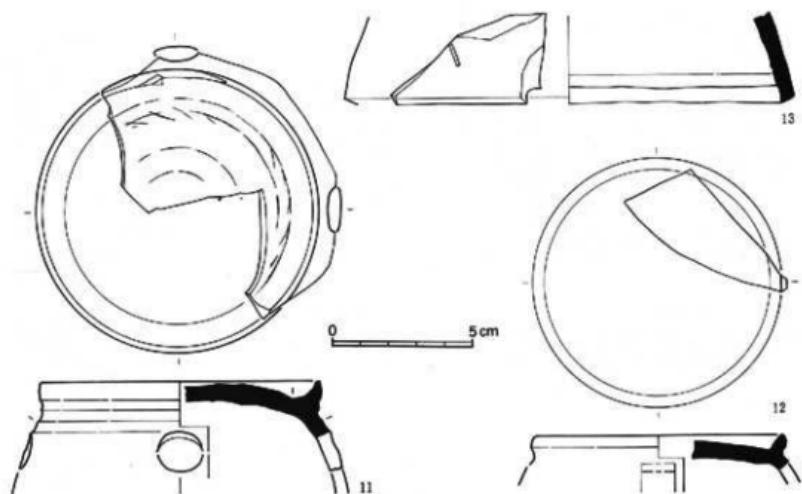
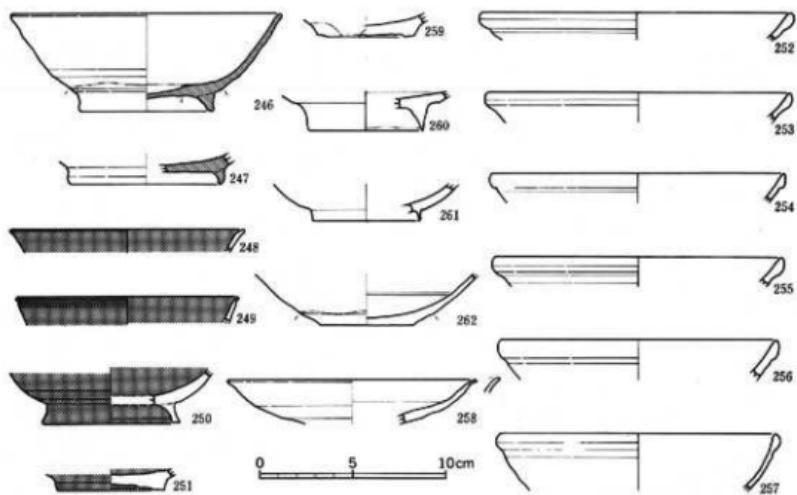
図面六
遺物実測図
勝興寺南接地区



圖面七

遺物実測図

勝興寺南接地区



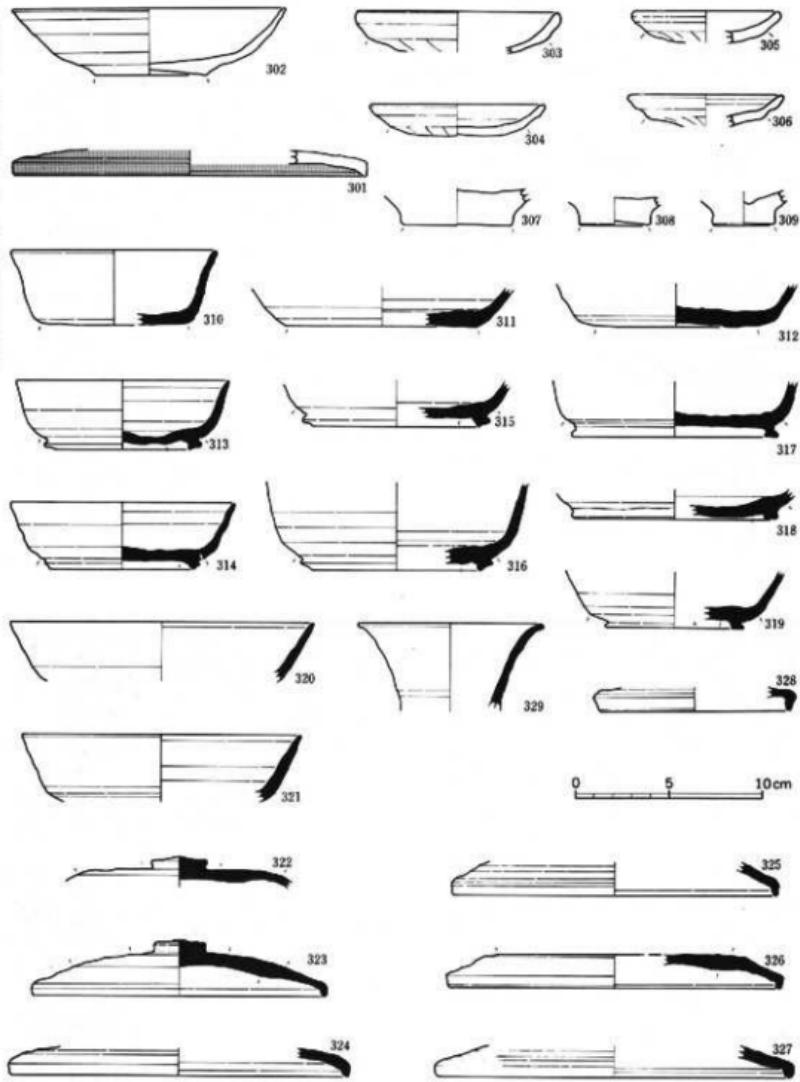
灰釉陶器；246~247，綠釉陶器；248~251，白磁；252~262
陶硯；11~13

縮尺1/3

縮尺1/2

図面八
遺物実測図

勝興寺南側地区



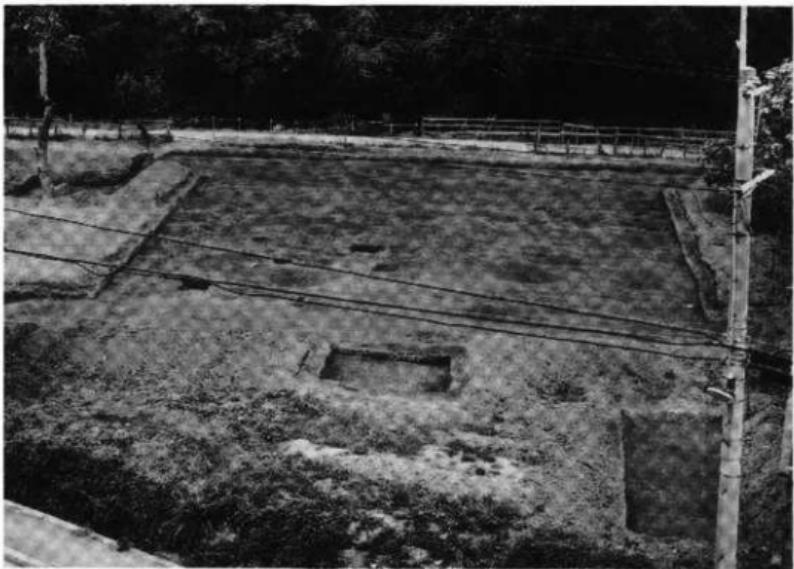
土師器；301~309、須恵器；310~327

縮尺1/3

圖版一 遺構 勝興寺南接地区



1. 東半部全景（西）

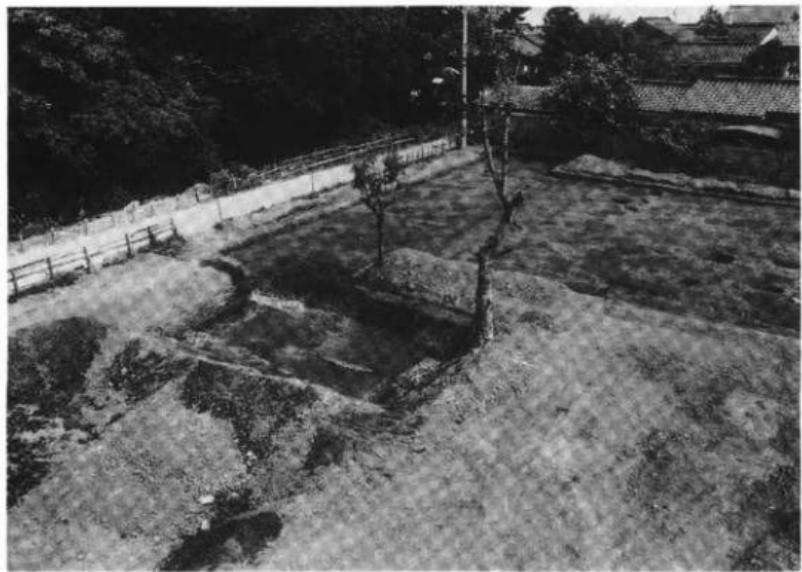


2. 東半部全景（南）

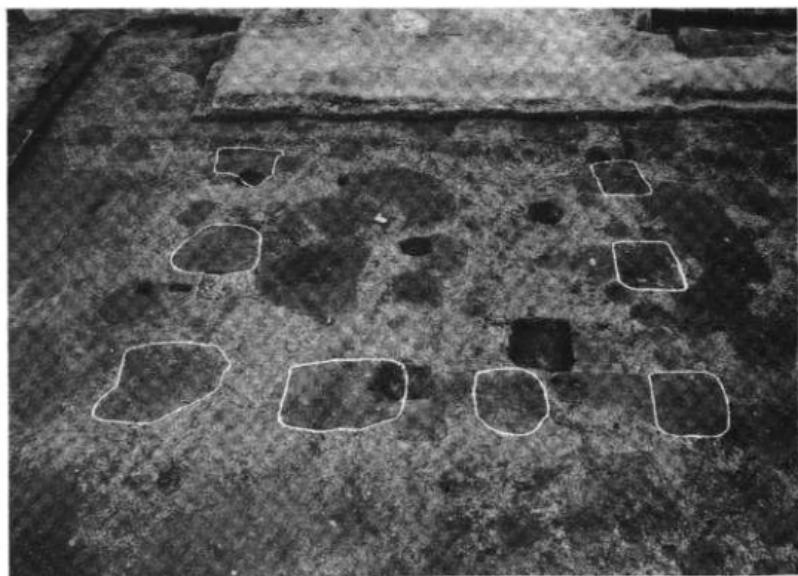
圖版二
遺構 勝興寺南接地区



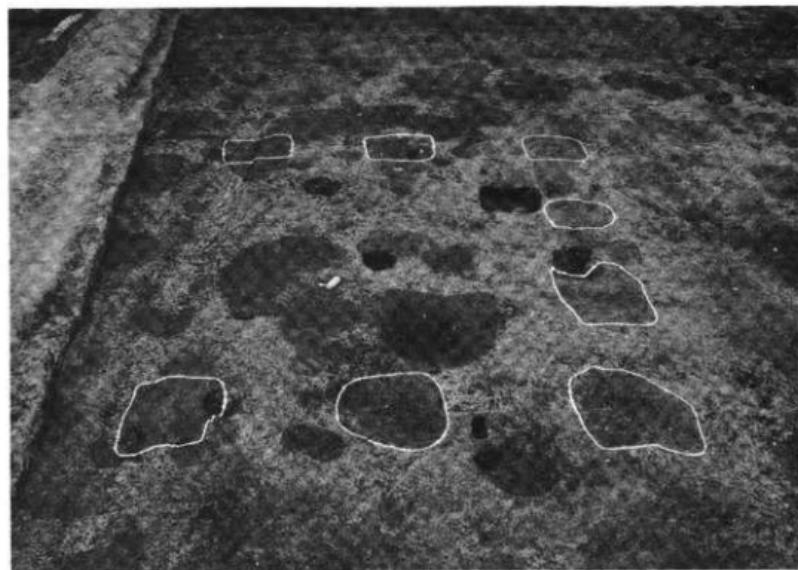
1. 西半部全景（東）



2. 北東部全景（西）

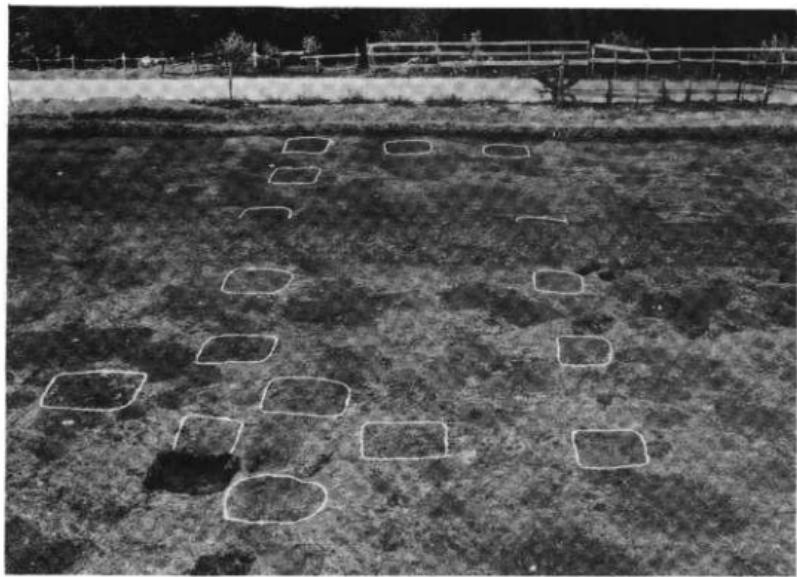


1. S B01全景(東)

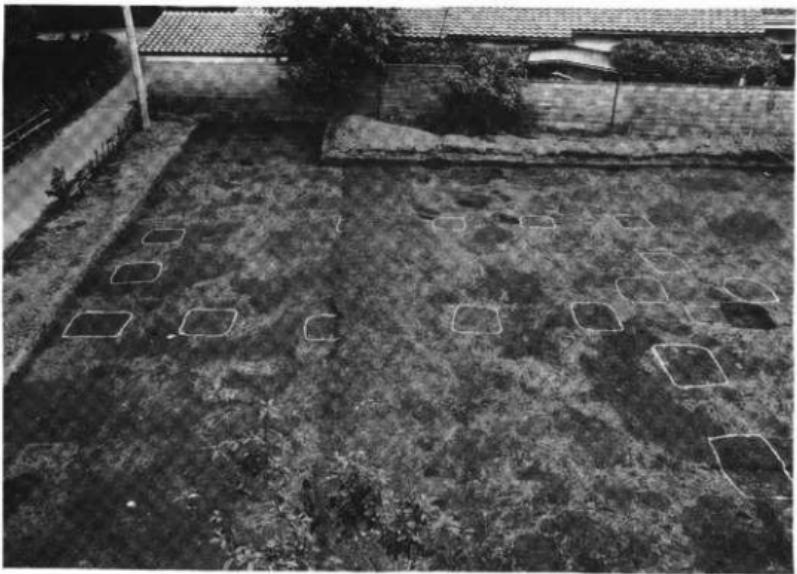


2. S B01全景(南)

圖版四
遺構
勝興寺南接地區

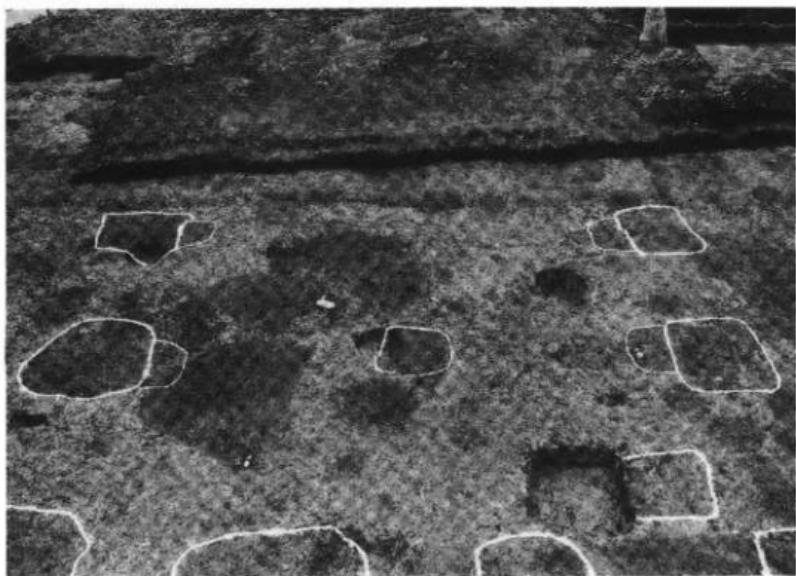


1. SB02全景(南)

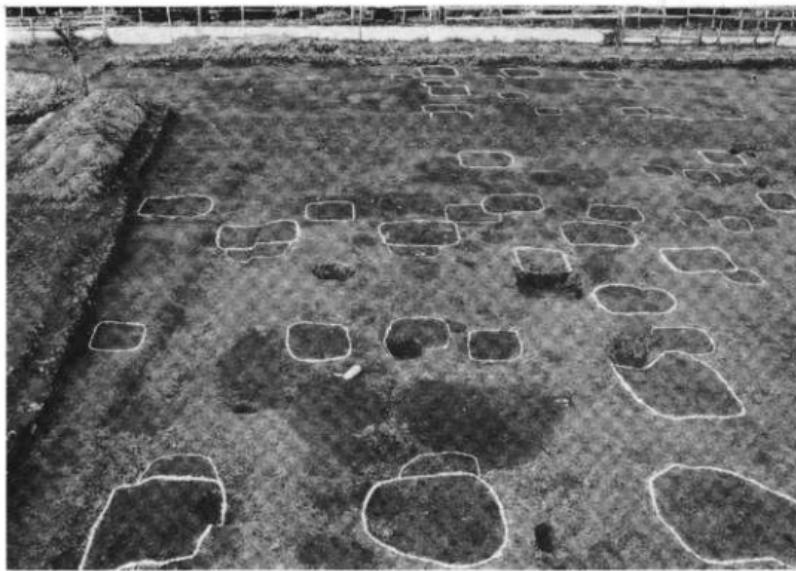


2. SB02全景(西)

図版五 遺構 勝興寺南接地区

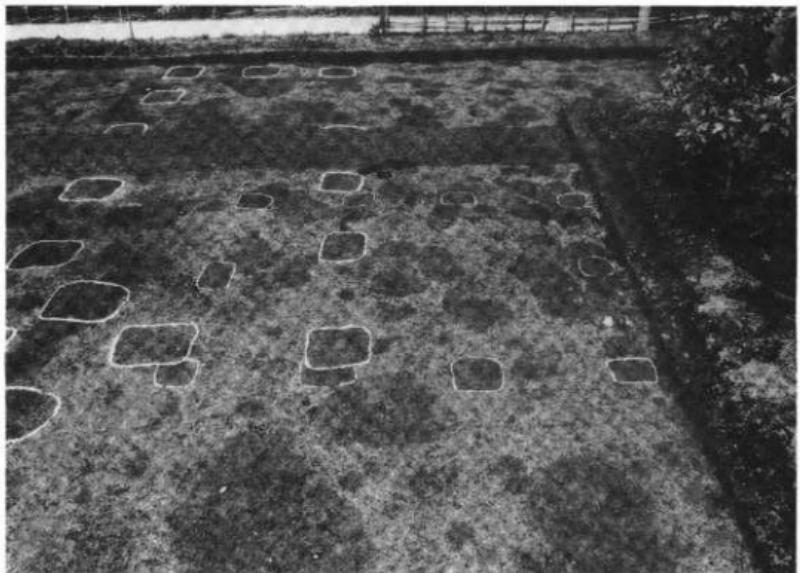


1. SB03全景(東)

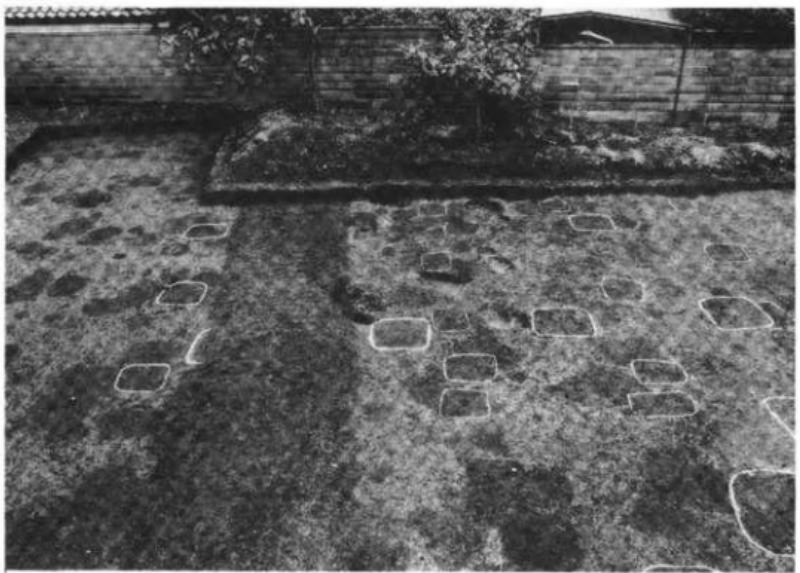


2. SB04全景(南)

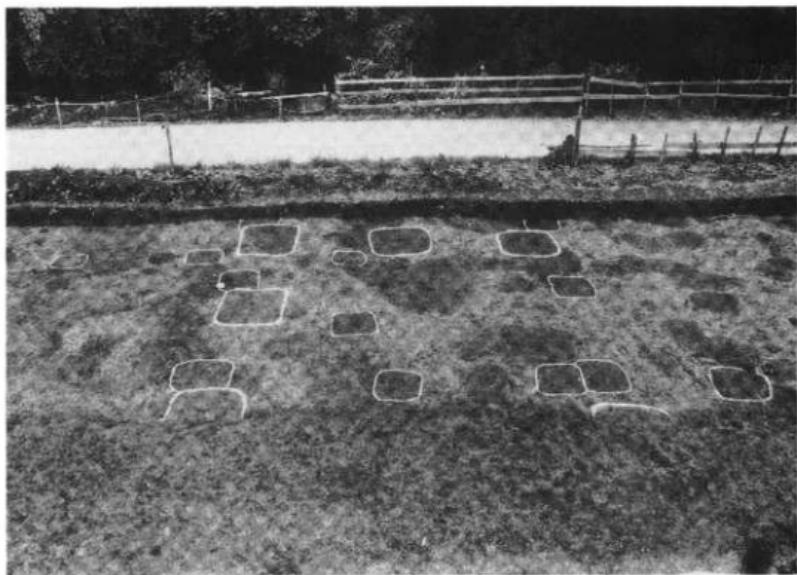
圖版六 遺構 勝興寺南接地區



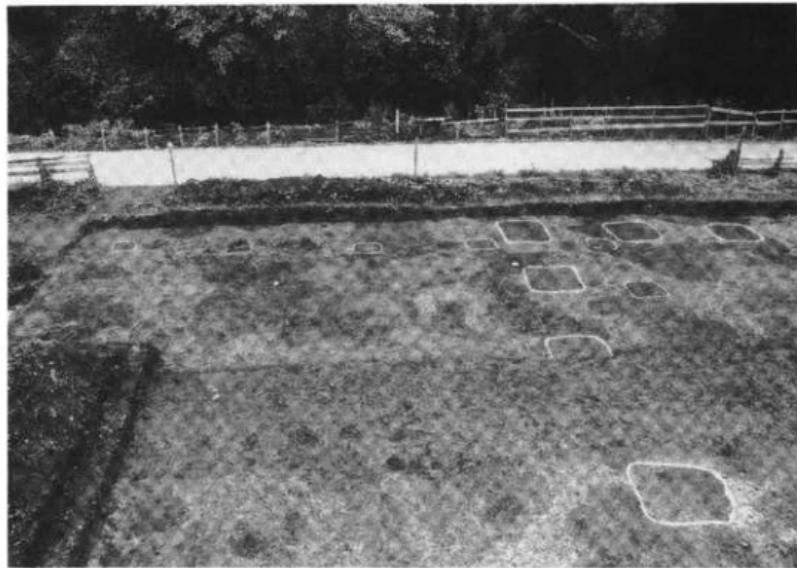
1. SB05全景(南)



2. SB06全景(西)



1. S B07全景(南)



2. S B08全景(南)



1. 敷地全景（東）



2. トレンチ（北）

圖版九 遺構 勝興寺西側地区

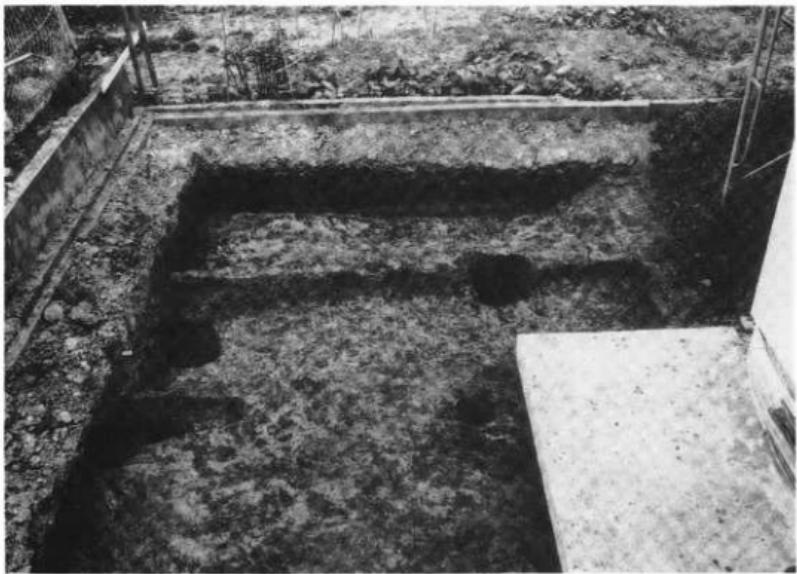


1. 敷地全景（北東）

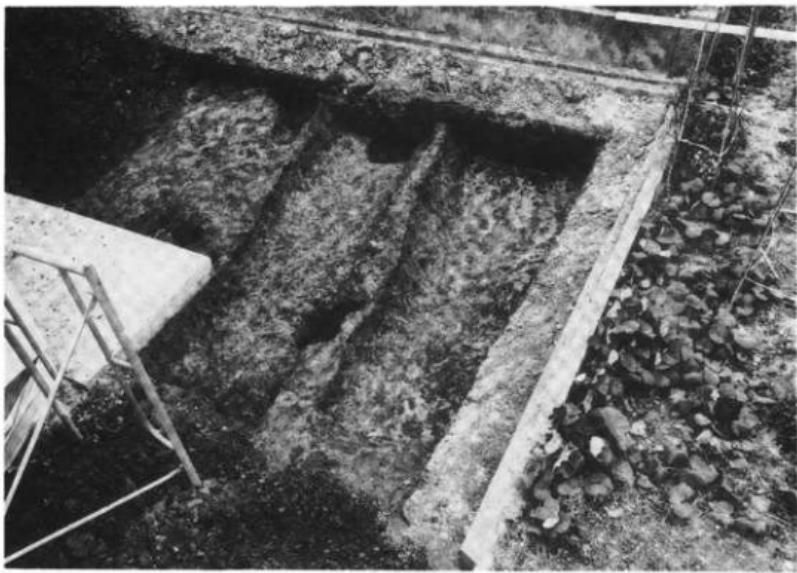


2. 敷地全景（南東）

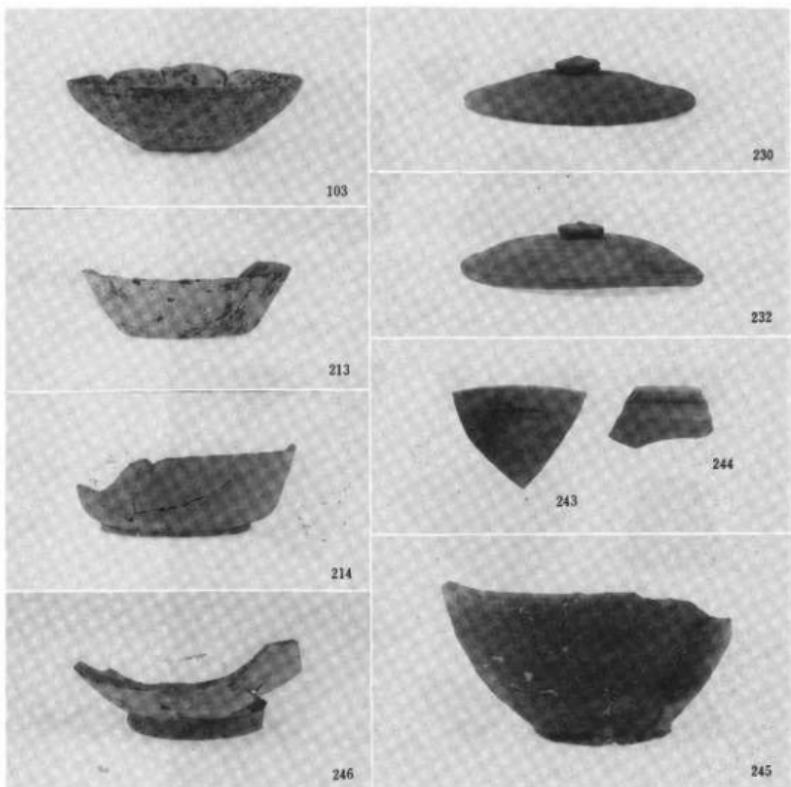
圖版一〇 遺構
國分寺東側地區



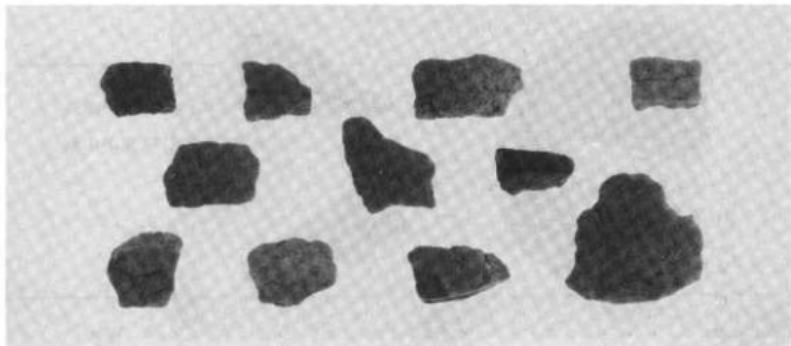
1. 全景（南西）



2. 全景（東）



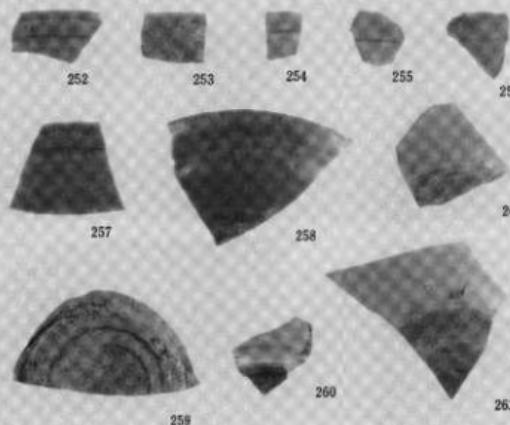
1. 土師器・須恵器・灰釉陶器



2. 製塩土器



1. 灰釉陶器・綠釉陶器



2. 白磁



3. 陶瓦

高岡市埋蔵文化財調査概報第4冊
越中國府関連遺跡調査概報Ⅱ

1988年3月31日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7-50
印刷所 小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町3
